

SSOT実現に向けた データ連携基盤とは

EAI・ETLで実現する企業データ統合の
ベストプラクティス

20 MINUTES | EXECUTIVE SESSION

分析基盤の成否は、必要なデータを
届け続けられるかで決まる

パナソニック デジタル株式会社



「分析基盤」だけでなく、「データが届く仕組み」までセットで考える

1

**なぜ分析基盤だけでは
活用が進まないのか**

分析基盤を導入しても
活用が定着しない理由

課題

2

**SSOTを実現するには
何が必要か**

SSOTとデータ連携基盤の
関係・役割

原因

3

**自社ではどこから
着手すべきか**

自社の現状を整理する
5つの確認ポイント

アクション

分析基盤とデータ連携基盤をセットで検討する必要性を理解する

データ連携の複雑性が、分析基盤の拡張を制約する

1 課題
なぜ分析基盤だけでは
活用が進まないのか

2 原因
SSOTを実現するには
何が必要か

3 アクション
自社ではどこから
着手すべきか

問題は「データがない」ことではなく、「すぐに正しく使えない」こと

所在・責任の分散

基幹・SaaS・Excelに
分散し、管理責任が
不明確

変更対応の手作業

変更のたびに人が
抽出・加工・
受け渡しを繰り返す

定義・基準の不統一

指標の定義・粒度・更
新の頻度等が部門やシ
ステムで異なる

運用のブラックボックス

連携仕様や障害対応
を担当者しか説明でき
ない

分析基盤の追加・変更に追従できず、意思決定のスピードが落ちる

経営が求める「単一の真実」が存在しない

1	課題	2	原因	3	アクション
なぜ分析基盤だけでは活用が進まないのか		SSOTを実現するには何が必要か		自社ではどこから着手すべきか	

同じKPIでも参照元・集計条件・更新時刻が異なると揃わない

異なる参照元



経営への影響



問題は数字の違いではなく、正しい数字を決め、維持する仕組みがないこと

SSOTとは何か

1	課題	2	原因	3	アクション
なぜ分析基盤だけでは活用が進まないのか		SSOTを実現するには何が必要か		自社ではどこから着手すべきか	

会社の中で、誰もが合意された数字と定義をもとに判断できる状態



SSOT = すべてを1か所に集めること、ではない

SSOTを成立させる4つの設計事項

1	課題	2	原因	3	アクション
なぜ分析基盤だけでは活用が進まないのか		SSOTを実現するには何が必要か		自社ではどこから着手すべきか	

正しさを決めるだけでなく、届き続ける状態まで設計する

1

源泉

どのシステムを
正式な情報源とするか

2

定義

指標・計算式・粒度を
どう統一するか

3

実行条件

いつ、どの条件で
処理を実行するか

4

運用手順

監視・通知・再実行を
どう運用するか

4つの設計を、日々のデータ処理として実行・維持するのがデータ連携基盤

SSOTのルールを、毎日のデータ処理として自動実行する



人に依存した受け渡しから、ルールに基づくデータの流れへ

データ連携基盤としてのASTERIA Warpの役割

1 課題
なぜ分析基盤だけでは
活用が進まないのか

2 原因
SSOTを実現するには
何が必要か

3 アクション
自社ではどこから
着手すべきか

既存システムと分析基盤の間で、接続・変換・実行・運用を共通化する



導入済み：用途拡張・標準化 | 未導入：個別開発との比較

ベストプラクティス ① 標準化

1

課題

なぜ分析基盤だけでは
活用が進まないのか

2

原因

SSOTを実現するには
何が必要か

3

アクション

自社ではどこから
着手すべきか

標準化の対象は「接続方法」だけではなく、開発・運用・変更管理の全体

BEFORE | 個別連携

- × 命名が異なる
- × ログ形式が異なる
- × 通知先が異なる
- × 再実行方法が異なる
- × 担当者ごとに作り方が違う



AFTER | 共通基盤

- ✓ 共通命名規約
- ✓ 共通ログ
- ✓ 共通監視・通知
- ✓ 共通再実行方式
- ✓ 再利用可能なテンプレート

新しい連携を増やすほど、標準化の効果が大きくなる

ベストプラクティス ② 小さく始めて広げる

1 課題
なぜ分析基盤だけでは
活用が進まないのか

2 原因
SSOTを実現するには
何が必要か

3 アクション
自社ではどこから
着手すべきか

最初から全社統合を狙わず、価値と再利用性が高い領域から始める

STEP 1 対象選定

売上・在庫・原価など
優先KPIを決める

STEP 2 自動化

取得・変換・配信を
仕組み化する

STEP 3 標準化

テンプレートと
運用ルールを整備

STEP 4 展開

他KPI・他部門・
AI活用へ広げる

選定基準：経営判断への影響が大きく、手作業が多いデータ

活用事例 | 全社共通基盤と、利用部門ごとの柔軟な支援を両立

共通基盤はIT基盤運用チームが支え、データ設計・BI開発は利用部門の体制や成熟度に応じて役割を変更

① 何に困っていたのか

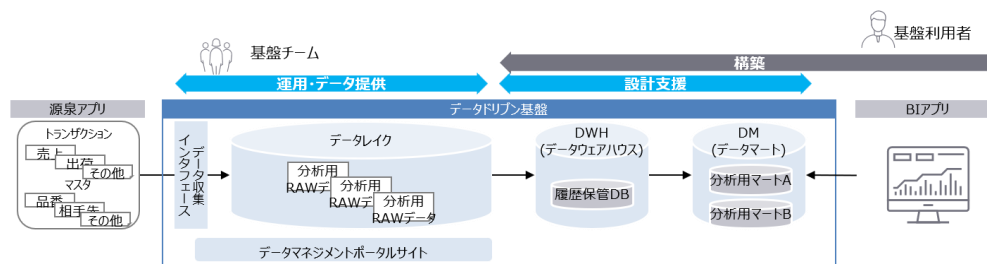
利用部門ごとに
必要な支援レベルが異なる

- 複数組織を横断する大規模分析
- 基盤の運用対象が広範囲
- 部門ごとにスキル・体制が異なる
- 一律のサービスでは柔軟性が不足

共通化と個別対応の両立が課題

② 何を変えたのか

共通基盤をサービスとして提供



A

データ提供サービス

必要なRAWデータを提供

B

DWH・DM環境提供

加工・分析環境を提供

C

設計・保守支援

データエンジニアが伴走

③ 何がよくなったのか

共通基盤の安定性と
柔軟なデータ活用を両立

利用部門主体型

基盤・データを提供
設計・BI開発は利用部門

データエンジニア伴走型

データ設計・加工・保守まで
サービスとして支援

基盤の安定運用を共通化しながら、利用部門の体制・成熟度に応じて支援範囲を変更

活用事例 | 業務システム再構築と、データ活用基盤を同時に整備

分析用途が明確だったため、ASTERIA WarpでERP・SalesforceからDWHへ直接データを届ける構成を採用

① 何に困っていたのか

業務システム再構築だけではデータ活用までつながらない

- ERPとSalesforceの連携が必要
- 分析用データの準備も必要
- 個別開発では開発・運用負荷が増加
- 業務連携と分析連携の一体設計が必要

「つなぐ」と「活用する」を同時に設計

② 何を変えたのか

業務連携と分析連携をASTERIA Warpへ集約



③ 何がよくなったのか

必要な業務データを継続的にBIへ届ける基盤を実現

- ✓ ERP・Salesforceの連携を共通化
- ✓ DWH向け加工処理を集約
- ✓ Redshift / SQL Serverへ継続蓄積
- ✓ QuickSight / Power BIで活用
- ✓ 個別開発と運用負荷を抑制

用途から逆算した必要十分な構成

大規模な構成ありきではなく、利用目的から逆算して必要十分なデータ連携基盤を設計

自社で確認したい5つのポイント

答えられない項目が、データ連携基盤の検討テーマ

- ✓ 売上・在庫・原価など、主要KPIの源泉は決まっているか
- ✓ KPIの定義・粒度・更新時刻を説明できるか
- ✓ ExcelやCSVによる手作業の受け渡しが残っていないか
- ✓ ログ・監視・通知・再実行を共通化できているか
- ✓ 接続先の追加・変更時に影響範囲を把握できるか

CHECK

自社では
何に答えられな
いか

答えられない項目が
相談テーマになる

1つでも曖昧なら、分析基盤の前にデータ連携を整理する価値がある

まとめ

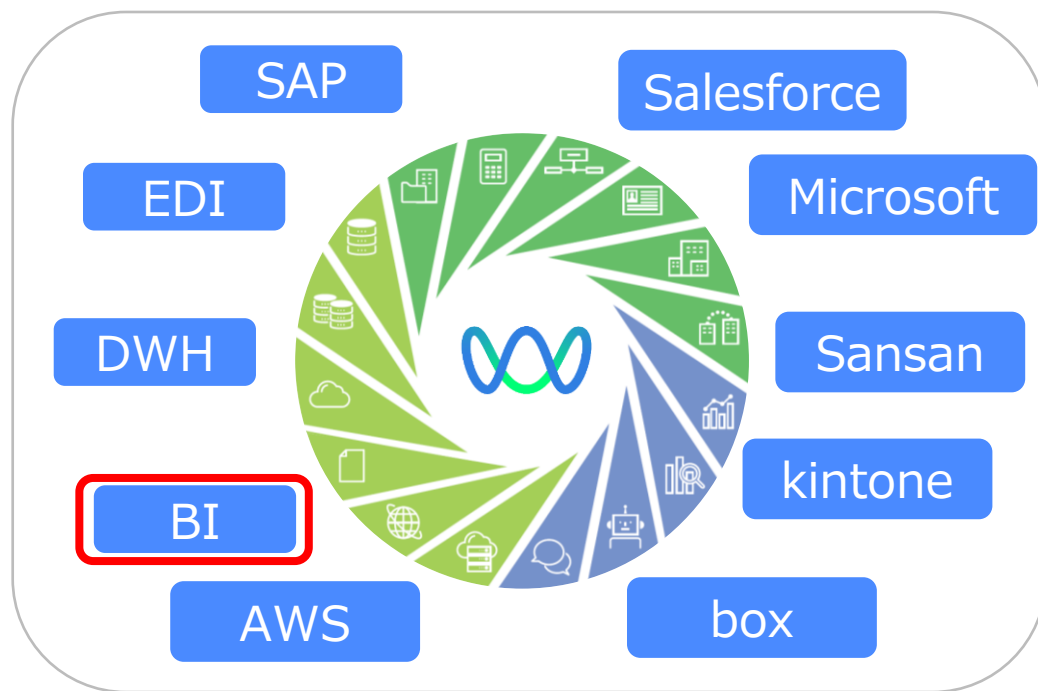
SSOTを実現するためには、 データ連携基盤が重要である

- 1 分析基盤の活用を左右するのは、データを届け続けられる仕組み
- 2 SSOTとは、何の目的で、どの定義の数字を見るのかを揃えた状態
- 3 データ連携基盤が、その状態を日々の運用として維持する

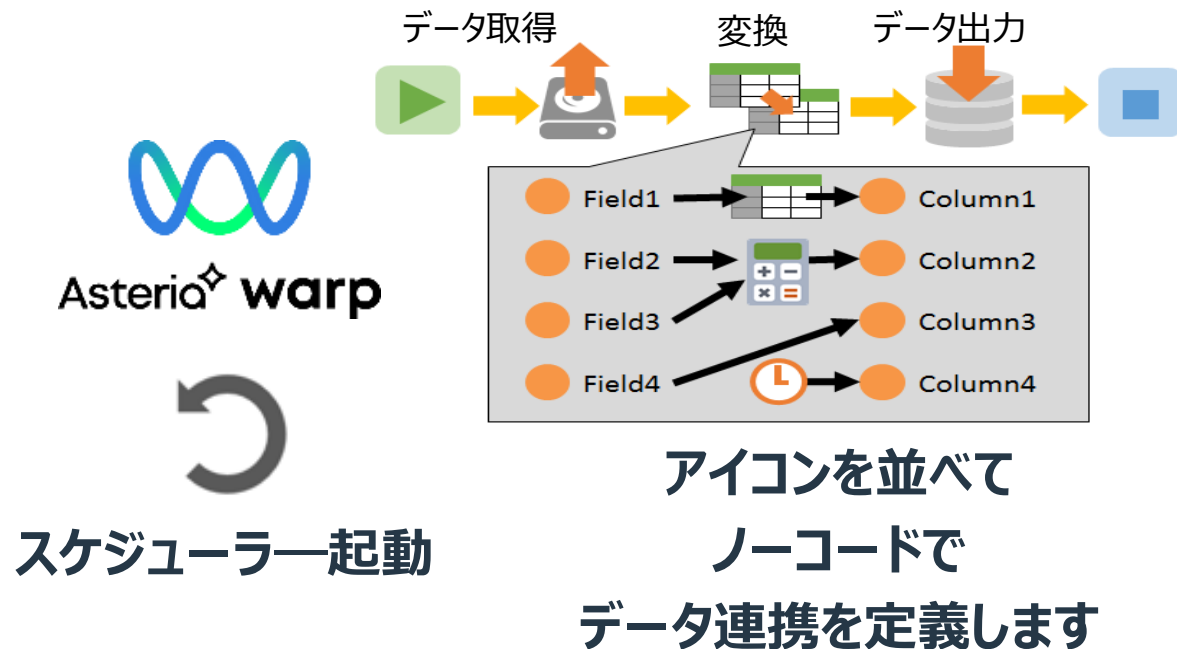
分析基盤の構想段階、既存連携の標準化、ASTERIA Warpの用途
拡張など、現在の検討段階からご相談ください

ノーコードで設計開発を行うことで、様々なシステムやサービスと連携し、業務の効率化やデータの活用を実現するデータ連携ツール

100以上のサービスやシステムと迅速に連携



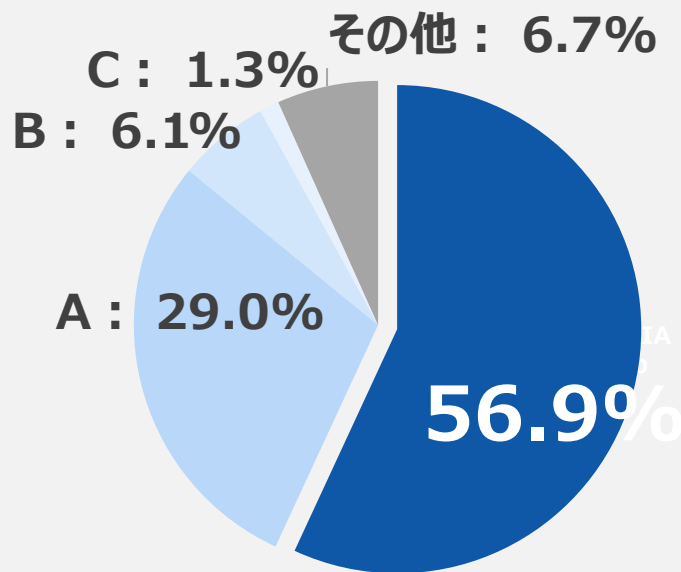
シンプルな操作で超高速開発



Appendix | ASTERIA Warpが選ばれる理由

理由 1

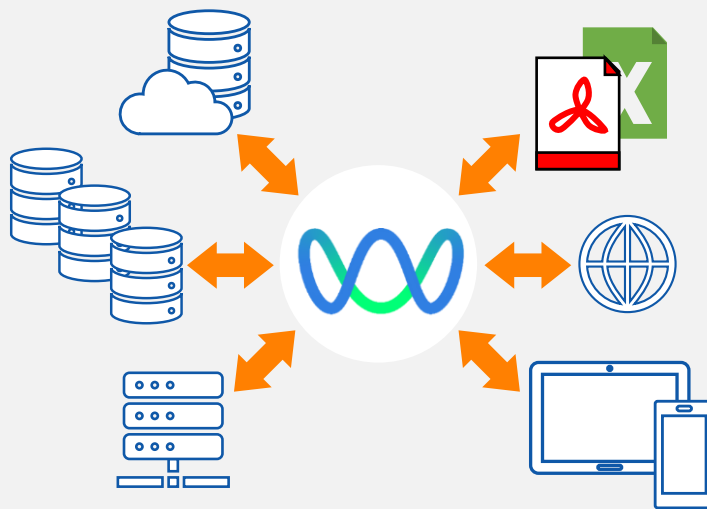
国内No.1のシェアを誇るデファクトスタンダード



出典：テクノ・システム・リサーチ「2024年ソフトウェアマーケティング総覧 EAI/ESB 市場編」

理由 2

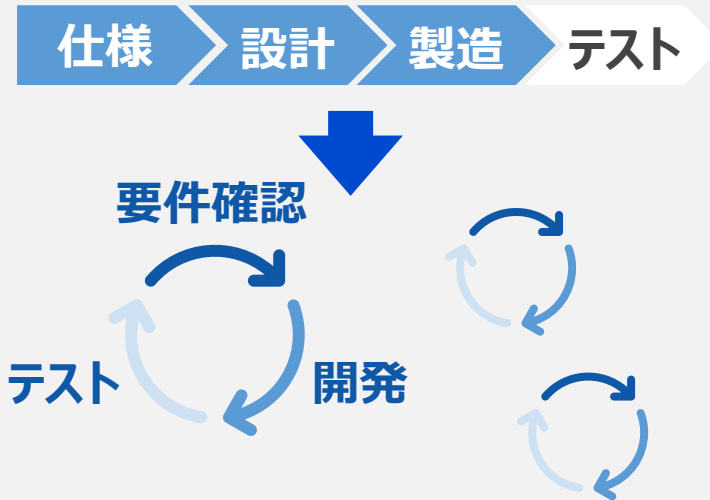
ニーズに応える
豊富なアダプター



ERP接続のアダプターも豊富
API連携にも対応

理由 3

開発人材が豊富
ノーコードツール



ノーコードなので開発が簡単に
メンテナンス性も向上

サービスをつなぐASTERIA Warp+
パナソニック デジタルの独自のEAIサービスにより
お客様のデータ連携を支援しております

パナソニック デジタル



- ① **独自テンプレート/標準ドキュメント**により開発期間の短縮
- ② **豊富な支援メニュー**により
お客様の内製化も合わせて支援
- ③ **実績・ノウハウを持つSE**にて
導入・開発・運用各フェーズでアドバイス